

平成23年度の振り返りと
平成24年度に向けて

当センターでは、活力ある地域づくりに寄与するという理念のもと、平成23年度も様々な事業を行ってきた。

その中には、徒来から行つてきたものもある。新たな取り組みとして行つたものもある。今回は、その中から“出会いと繋がり”という観点で振り返つてみたい。

当センターにおいては、平成19年度から「移住・交流事業」を実施し、県外、特に都会に住んでいる方々を中心として、愛媛に興味を持って移り住もうとする方に対する相談受付や情報提供などの支援を行っており、人の温かさや気候の温暖さを求めて年々愛媛に移住をしてくる方が増えてきている。

そのような状況において、移住してくる方々の傾向を見ると、私自身が描いていた「移住」のイメージと少し違うなと感じるようになった。

それは、従来から言われていた「セカンドライフ」的な第二の人生を田舎でのんびり暮らす方もおられるが、定年退職した方々よりも若い移住者が多いことだ。



統計で見ると、働き盛りの50代以下の割合が45%と半数近く（その子供を含めると約70%）を占めるとともに、その若い世代の移住者について着目してみると、悠々自適な生活というよりは、移住をする前から「こんな仕事をしたい」「こんなことをやりたい」という目的を持つている方が多いのである。

そういった傾向を見ているうちに、私の中では、もしかしたら、移住・交流事業はその捉え方によつて地域の活性化にかなり寄与するのではないかと考えるようになった。

地域の課題を解決しようとする際に、どうしても地元の人間だけでは困難だとするならば、その課題を解決してくれる人材を外部から呼び込んでいくという「戦略的移住」を進めていくことも可能ではないかと……

そのようなことを考えていた矢先、二つの仕事に取り組むことになり、その思いはさらに強くなった。

一つは、今回の特集で取り上げる「地域おこし協力隊」。

この制度を活用した県内自治体に何人かの協力隊員がやってきた。

センターでは、昨年度からその地域おこし協力隊の方々同士の「出会いと繋がり」の場を設けようということで意見交換会を始め、今年度で2回目を迎えることができた。

そして、この地域おこし協力隊制度をもつと広めようと「舞たうん」で取り上げることになり、座談会も開催することができた。

来年度も新たな協力隊員がやってくる予定であり、この意見交換会の3回目を開催することになったことや、意見交換会の流れから四国レベルでの交流会が本県で開催されるようになったことを嬉しく思っている。



(公財) えひめ地域政策
研究センター
主任研究員
須山 広周

資料3

中 西地区によるコーディネーター団体
支援の予定あり(平成21年度下)



もう一つは、前回の舞たうん(111号)でも書かせていただいた「過疎・離島地域における結婚サポート強化推進事業」である。

結婚支援は地域の活性化のために行政も参画しつつ行いうべきという考えのもと、どのようにすれば都会から女性を呼び込む形での結婚が可能なのかについて検討し、その結果を報告書としてまとめ、公表することとなっている。

この事業については、三重県の鳥羽市で
コーディネーターをされている原 康久氏

に愛媛にきてもらい、地域の活性化で一番大切なのは人と人が「出会う」ことだと教えていただいたことは大きな財産であり三重と愛媛の「繋がり」ができたと思う。

平成24年度に
向けて

これらに二つの事業に共通するのは、いずれも「外から人呼び込む」ということであり、移住・交流事業を違った角度から捉えていこうとする「戦略的移住」に繋がっていくのではないかと考えている。

そしてこれらの事業を行っていく中で“出会いと繋がり”がいかに重要かという点にも気づかされた。

2月に原さんにお会いしたた
際、原さんから、
「セクターは第
一次産業者との
繋がりをもつ
と強くするべき
で、そういう人
たちと『出会い
なさい』と言っ
ていただいたこ
とを覚えてい
る。

その言葉を意
識しながらも
「どうやって？」
という悩みを抱



トークサロン「農林水産資源の宝庫・愛媛の産業と地域づくり」



結婚支援に関する機運醸成セミナー

えていたとき、「農林水産資源の宝庫・愛媛の産業と地域づくり」と題して愛媛大学と共に、催で地域課題研究サロンの行うこととなり、第一次産業から地域づくりに結びつけている事例を多く聞かせていただくとともに、出席していただいた農林水産業の方々と知り合いになることができた。

これが何かの偶然なのか、それとも誰かが引き寄せてくれたものなのかはわからない。しかし、せつかにいただいたご縁なのだから、平成24年度は、「大地の恵み」を作っている方々のところに向いていこうと思う。

そして、「出会いと繋がりが」という言葉を胸に、人と人が繋がっていくことのお役に立てるような事業を考えていきたいと思っている。